

経済・金融 フラッシュ

3月マネー統計 ～被災地での資金需要増加が加速

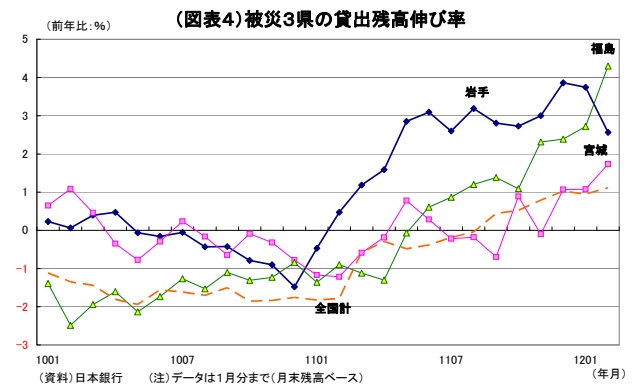
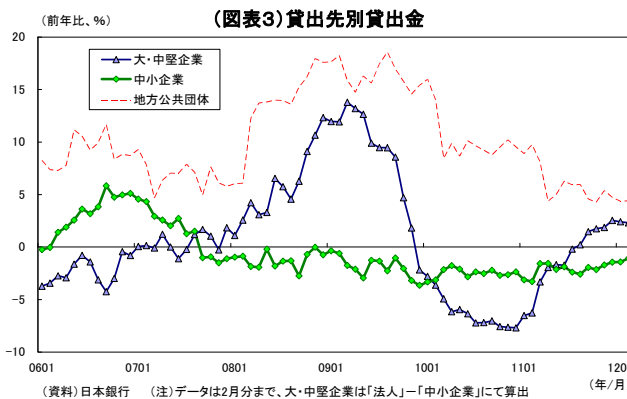
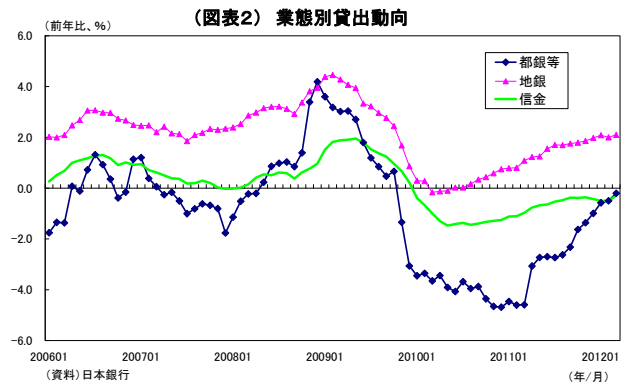
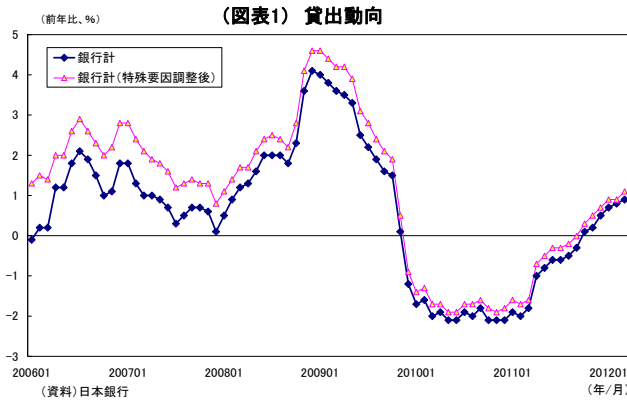
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

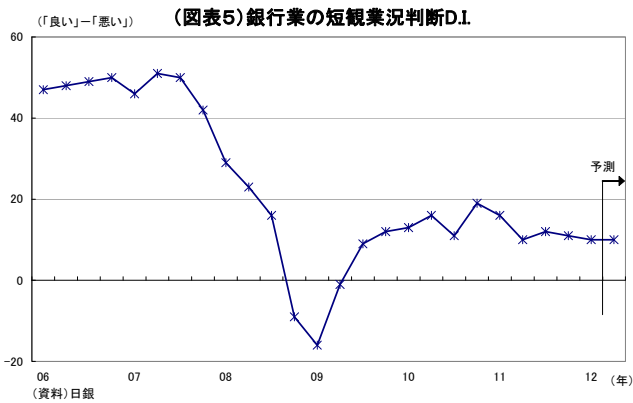
1. 貸出動向：6ヶ月連続の前年比プラス

日銀が発表した3月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は0.9%(前月は同0.8%)と6ヶ月連続の前年比プラスとなった。プラス幅は引き続き月を追うごとに拡大している。

業種別の内訳では、地銀が前年比2.1%増(前月改定値は同2.0%増)、都銀等が同▲0.2%減(前月は▲0.5%減)。都銀のマイナスは続いているものの、マイナス幅の縮小が進んでおり、プラス反転も出てきた(図表1～3)。

貸出の増加要因に関しては、従来同様、「燃料費が増加する中で社債発行が困難な電力会社による資金需要」、「被災地での復旧・復興に伴う資金需要」、「M&Aに伴う資金需要」が寄与していると考えられる。このうち被災地での資金需要については被災3県の貸出残高が月次で確認できるが(2月分まで)、最近では貸出増加の加速がみられる(図表4)。





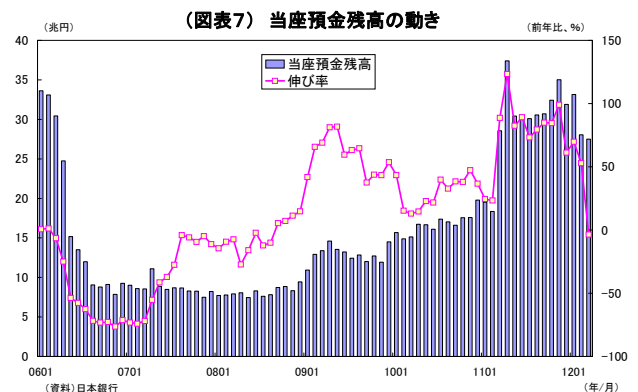
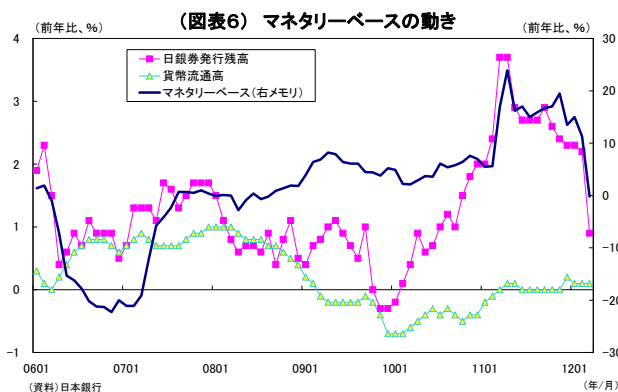
銀行貸出は増加基調となってきたが、3月日銀短観での銀行業の業況判断D.I.は10と前回12月調査から1ポイント低下。10年12月調査の19をピークに低下した後、低迷している。貸出増加が緩やかに留まる中で、銀行間競争が激しく、銀行の利ざやが圧迫されていることが背景にあると考えられる(図表5)。

2. マネタリーベース：3年7ヵ月ぶりの前年割れに

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す3月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比▲0.2%(前月は同 11.3%)と、3年7ヵ月ぶりにマイナスに転じた。内訳では、日銀当座預金の伸びが前年比▲3.6%と前月の同 52.8%から大きく低下(図表 6,7)。日銀の緩和姿勢を織り込んでいた為替市場ではサプライズと捉えられ、円が上昇する反応がみられた。

今回は前年比での比較対象となる昨年3月に日銀が震災による市場の混乱を防止すべく大量の資金供給をしていたため、その反動が出たという部分大きいですが、季調済み残高で見ても2ヶ月連続の前月比マイナスとなっている。欧州危機が一服していたうえ、3月は国債の償還などで日銀当座預金が増えやすい時期であるため、資金供給を絞った影響もあるようだ。

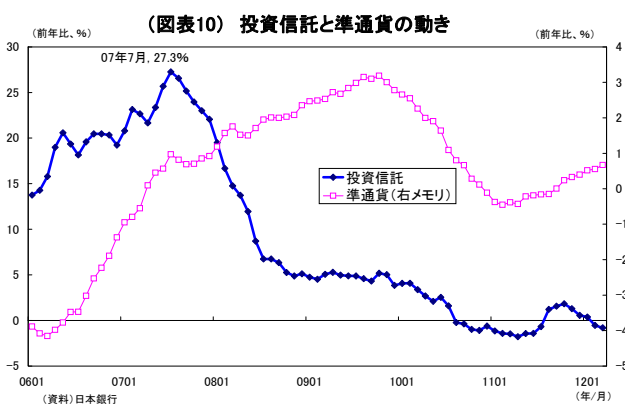
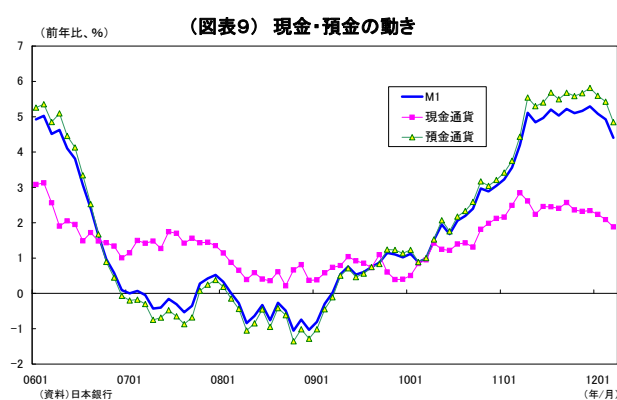
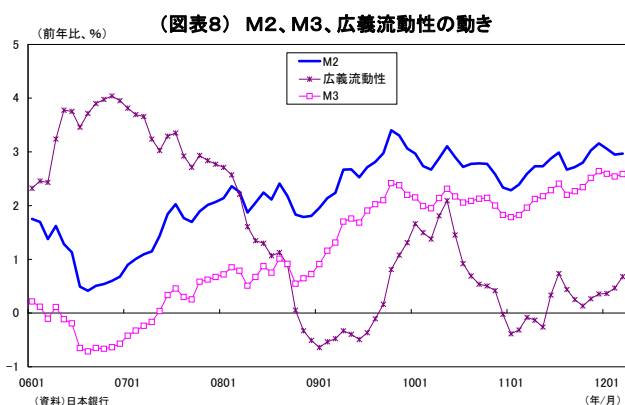
昨年4月は日銀の震災後大量供給のピークにあたり、残高はさらに増加していたため、次回のマネタリーベースも前年比でマイナスとなる可能性が高い。しかしながら、3月も残高自体は依然高水準にあり、日銀当座預金残高も足元では35兆円前後に回復。日銀の金融緩和スタンスは明確であるため、今後とも高水準の資金供給が継続されるだろう。



3. マネーストック： 投資信託の低迷続く

通貨供給量の代表的指標である3月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年比3.0%増（前月は2.9%増）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同2.6%増（前月は2.5%増）と、それぞれ前月から若干伸び率が拡大。引き続き高い伸び率を維持している。M3に投信や外債などを含めた広義流動性も同0.7%増（前月改定値は0.5%増）とプラス幅が拡大してきている。

広義流動性の内訳では、定期預金など準通貨の伸び率が引き続き徐々に上昇している一方、普通預金など預金通貨の伸び率が前年比4.8%（前月は5.4%）と12ヵ月ぶりに5%を下回った。震災から一年が経過し、前年比で見た場合の震災に伴う流動性選好の影響が一巡しつつある。ただし、投資信託への資金流入は進んでおらず、引き続きリスク回避姿勢ならびに流動性選好の強い状況が続いているとみられる（図表8～10）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。